

# コラム グリーンスローモビリティを活用できる地域とその活用方法



三重野 真代  
東京大学公共政策大学院  
特任准教授

グリーンスローモビリティ(グリスロ)は自動車でもなく自転車でもなく、既存概念の中の「乗り物」とは異なる、新タイプの乗り物です。しかし、新しいといながらも、昔の馬車のような「新しいが懐かしさを覚える」。そんな乗り物だと思います。

グリスロの最大の特徴は、「ゆっくり」です。グリスロは時速20km未満しか出ません。マラソン選手のスPEEDです。高速性を尊ぶ現代の社会通念に反して、「そんなに急ぐときばかりじゃないでしょ」とグリスロは呼び掛けます。通勤・通学は「速く」移動しても、旅で島に来たら「ゆっくり」移動したくなりますよね。意外と「ゆっくり」で問題のない場面は、少なくありません。

2点目の特徴は「近くまで」です。低速のため、「普通に歩けるけど時にはしんどいかも」程度の、徒歩5〜20分程度の短距離移動に向いています。走行場所は、自動車が登場する以前からある「旧道」や集落内の道が向いています。自動車の円滑な走行を前提とする国道や県道は、ほかの交通との速度差が大きく危険です。



3点目は「五感」です。グリスロは電動のため、車内は静かで会話がしやすいです。オープンでガソリン臭もないので、風を感じ、草花の香りに包まれ、美しい田畑や山々を見ながら、川や虫の音と運転手の「うちの地域はね」の声を聞く。五感で地域を体験できる。旅行者にとつて忘れられなくなる「思い出の1枚」となる時間を、グリスロは演出できます。

グリスロは普通免許で運転できます。ですから、多くの住民で運転手を分担する方法も面白いです。農作業の閑散期だけ運転手をする、気分転換で月に1日だけ運転手をするなど旅人との会話は楽しいし、故郷を改めて誇らしく感じられるかもしれません。旅人だけでなく、住民にも、特別な体験を届けられる活用は、「住んでよし訪れてよし」の地域づくりにもつながります。

最後に、今世界中で環境問題の意識の高まりから、乗り物は電動など化石燃料を使わない形に加速度的にシフトしています。観光客向けも同様です。日本でも、海外の人をお迎えし、持続可能な観光に取り組むのであれば、環境に配慮した電動車を導入すべきです。環境に配慮のない地域は選ばれない。そんな時代はもう幕を開けているのです。

# 13

京都府  
和束町

## 山間の観光地において、グリーンスローモビリティを周遊交通に採用することで体験の満足度も高めている事例

### ■ 取り組み主体

和束町・和束町商工会

### ■ 交通課題

周遊交通

京都府 和束町

人口：3,571人

面積：64.93 km<sup>2</sup>

人口密度：55.0人 / km<sup>2</sup>



### 概要

茶畑の景観が人気の観光地において、低速・排ガスを出さない・開放的というグリスロのメリットに着目。幅員の狭い道路が続く茶畑の中の道路を農作業車専用とした上で、観光客向けにビュポイントやカフェ、物販場所等を周遊する「茶畑周遊ガイドツアー」をゴルフカート型のグリスロ車両を活用した自家用有償旅客運送により導入し、観光と農業の共存を実現している。ツアーは約8kmのコースを75分かけて周遊する完全予約制で、3月～11月の土日祝日の予約がある場合のみ、1日最大4回運行している。地元バス会社の奈良交通株式会社と連携して、バスの乗車証明書を提示すると大幅な割引を行う施策も利用者増加に貢献した。

### 運行方法

和束町が自家用有償旅客運送の登録を受けて運送主体となり、運行については和束町商工会に委託。運転手は観光案内所の職員が担い、ガイドを行う。



石寺の茶畑



茶摘みの様子



コースを提案するガイド



「和束町石寺の茶畑」は2015年に「日本遺産」の認定も受けた

### 費用負担

和束町としての事業費は年間200万円程度。車両購入費には環境省の補助金を活用。運賃は大人1000円で、奈良交通バスの乗車証明書がある場合には300円に割引。料金は1000円程度であれば利用するといった回答が多かった実証実験でのアンケート結果も参考に、同距離のタクシー運賃の半額程度を目安に設定。

### 導入の背景

茶葉は品質管理上、収穫後すぐに製茶場に持ち込む必要があったが、観光客の自家用車が茶畑内の狭い道で立ち往生して農業者の妨げとなっていた。これを解決するため、2017年から実証実験を行いつつ料金やコースを決定。



グリスロ（愛称はゲーチャモ）からの景色

### 効果

農作業への悪影響を抑えつつ、観光客の周遊手段を確保し、観光施設や商店・カフェ等の立ち寄り場所での消費機会の向上に寄与。



茶畑への農作業車以外の車両の侵入を注意する看板

### その他参考となる情報

利用者は高齢者が中心で冷房はないため暑い時期は避けられる傾向もある。利用者は事前にグリスロのことを知って計画的に利用する人よりも、出発地となる観光案内所での声掛けで利用につながる例が多い。史跡、複数の茶畑のビュポイント、カフェを経由し、経由地での立ち食いも可能だが、食事等をする場合には待機はしない。立ち寄り場所ではお茶のティーバッグや記念乗車証の進呈など、満足度向上のためのサービスも行っている。

住民利用を想定したコース設定の実証実験も実施したが、利用者ニーズに合わなかったこと、一般道の走行時に速度が出せないこと等から不採用となり、観光に特化して運用。タクシー事業者が運行を担う住民向け乗り合い交通とすみ分けて運行している。



乗客へは乗車記念品を贈呈している



右/公共バス  
上/観光客で混み合う公共バス



**導入の背景**

町営のコミュニティバスが運行していたが、本数が少なく休日運休であることや「自宅の前まで来てほしい」というニーズを満たせずに利用者が少なかった。また、重要伝統的建造物群保存地区に選定された舟屋が並ぶ地区では、観光客が増える一方であるのに対し、路線バスは1時間に1本程度で公共交通が不十分であることや、舟屋周辺の駐車場が少ないため自家用車が流入しやすく、狭い道路での歩行者の安全確保という課題を抱えていた。

当初は定時定路線型のグリスロクの導入実証実験も実施したが2021年から現在のデマンド交通のサービス提供が始まった。自家用有償旅客運送の制度を利用するに当たって地域公共交通協議で協議を行ったが、町内には個人タクシーも含めてタクシー事業者はおらず、反対もなく事業がスタートできた。

**POINT 観光客と住民のすみ分けを明確に**

住民と観光客は同一システムを利用できるが、予約方法に違いがあることなど、住民利用と観光利用のすみ分けが出来ている点でトラブルのない運営が実現できている。

**住民専用予約端末「いねばん」**



町内の全世帯に配備しているタブレット端末「いねばん」を使って「いねタク」の予約ができる。「いねばん」は防災などにも利用されている。

**観光客専用予約システム**



QRコードの設置場所を増やすなど観光客の利用促進を図る一方で、利用は町内に限るなどの制約も設けている。

**効果**

- 住民・観光客両者の公共交通の利便性確保
- 高齢化による生活利用者の減少が予想される中、観光利用者が住民の生活交通維持に寄与（開始以来、利用登録者数および1便当たりの平均乗車人数が増えている他、観光客の利用も増えている）
- 泊食分離の観光地域づくりの推進に寄与
- 交通GXの推進
- 生活交通の利便性の向上



海の京都コイン

- その他参考となる情報**
- 住民は通院や通学で平日の日に利用する一方、観光客は宿から飲食店への移動を中心に夜間に利用することから、朝7時45分から夜9時まで毎日利用できる時間設定になっている。予約は利用の30分前まで可能。
  - 車両は、日産の「e-NV200」6人乗り2台と「LEAF」5人乗り1台の計3台。補助金を活用して太陽光充電設備を整備している。
  - 予約システムアプリはオンデマンド交通システムを提供する民間企業に開発を委託したものを利用。予約方法は住民向けと観光客向けを分けており、観光客向けにはQRコードから予約、住民向けには2020年から行政防災無線の代わりとして町内の全世帯に配備しているタブレット端末「いねばん」を使った予約システムを提供している他、電話からも予約可能。利用者の自宅前も乗降場所として登録されている。
  - 「いねタク」の支払いにも使える「海の京都コイン」がふるさと納税の返礼品となっており、7市町の総額で1300万円のふるさと納税が集まった。海の京都コインは約270施設における、飲食・宿泊・体験の支払いに利用可能。伊根町役場が主導だが、観光協会から観光客目線のスポットの情報を連携して乗降地点を追加するなど、関係機関と協力することでサービスの向上につながった。

自治体の運営するデマンド交通が、泊食分離も意識して観光客向けに実用化され、観光協会（地域DMO）とも協力して案内できている事例

**取り組み主体**

伊根町

**交通課題**

周遊交通

京都府 伊根町  
人口：1,914人  
面積：61.95km<sup>2</sup>  
人口密度：30.89人/km<sup>2</sup>



**概要**

宿泊施設と食事施設を分ける「泊食分離」を進めている伊根町での観光において、町が運営する自家用有償旅客運送のデマンド交通「いねタク」が宿泊施設と食事施設間の移動手段として活躍している。

農泊地域協議会の中核法人（地域DMO）でもある伊根町観光協会では「いねタク」の利用を観光客に広めるために観光案内所・飲食店・宿泊施設等の観光関連施設を通して案内を進めている。観光客は、これらの観光関連施設に設置されている専用QRコードからスマートフォンで読み取り、ウェブ予約システムから利用登録することで予約が可能。利用の30分前まで予約可能だが、台数が限られている中、QRコードからの読み込みのみでの予約し、伊根町来訪前の予約を受け付けないシステムとすることで、混雑や急なキャンセルなどで住民利用に支障を来さない工夫によって、トラブルなく運営できている。

「いねタク」の支払いは、伊根町を含む京都府北部7市町の地域連携DMO「海の京都DMO」がふるさと納税返礼品として発行する観光客向け電子ギフト「海の京都コイン」でも可能とするなど、観光行政においても自家用有償旅客運送を観光客も使える移動手段として認識して活用を進めている。



伊根町の観光資源である舟屋は舟が屋内へ入れる構造で宿泊できる施設もある



舟屋群展望所からの風景



伊根町観光協会事務局長 吉田晃彦氏



伊根町企画観光課竹熊万由佳氏（左）と「いねタク」運転手

**運行方法**

町が運送主体となる自家用有償旅客運送（区域運行）。予約管理を含む運行については一般社団法人伊根町ふるさと振興公社に委託。運転手として第2種運転免許所持者・国土交通大臣講習受講者の住民計4人を雇用。

**費用負担**

- 導入経費**
- 車両調達、デマンド交通予約システムの構築・新型コロナウイルス感染症対応地方創生臨時交付金
  - 再エネ活用型EV充電設備整備工事・経済産業省補助（エネルギー構造高度化・転換理解促進事業補助金）
  - 運行経費
  - 運賃収入（1回300円）に加え、国土交通省補助（地域内公共交通確保維持改善事業（フリーダー系確保維持国庫補助金）、伊根町の公費負担約1200万円（起債に当たっては過疎対策事業債を活用）

**再エネ活用設備**

「いねタク」の待機場所となる町役場に太陽光充電設備を整備し、電気自動車の充電を可能にした。

**太陽光発電カーポートの電力をいねタクへ利用（e-NV200）**



**充電状況モニター**





15  
兵庫県  
豊岡市 城崎温泉

# 旅館組合に加盟する 30 以上の宿泊施設が送迎を共同化することにより、駅前の渋滞緩和や来訪者が迷わずに安心して宿泊施設にたどり着ける環境づくりに成功した事例

## ■ 取り組み主体

城崎温泉旅館協同組合

## ■ 交通課題

周遊交通

兵庫県 豊岡市 城崎地域

人口：3,125 人

面積：31.19 km<sup>2</sup>

人口密度：100.19 人 / km<sup>2</sup>



写真提供：豊岡市

## 概要

城崎温泉旅館協同組合が JR 城崎温泉駅から旅館の宿泊者がそれぞれの宿に向かうために利用できる共同送迎バス「チェックインバス」を運行している。組合加盟の 77 の旅館のうち、駅から距離がある 30 ～ 40 の旅館の送迎がこのバスによって行われており、駅から旅館街に続く道が大きく二方向に分かれるため 27 人乗りマイクロバス 2 台で、コロナ禍前は毎日午後 12 時 30 分～午後 6 時まで約 30 分ごとに送迎を行っていた。



チェックインバス

## 運行方法

城崎温泉旅館協同組合（以下、旅館組合）が運行をバス会社に委託し、委託を受けた全但バス株式会社が一般乗合旅客自動車運送事業許可申請を行っている。

## 費用負担

### ● 支出

導入時：マイクロバスは豊岡市の助成金で 1 台目を購入、その後、助成も受けつつ旅館組合からも支出して 2 台目を購入した

運営後：バス会社への運行委託費、駅での案内職員の人件費（直接、旅館組合から支出）を負担している

### ● 収入

利用料金は利用客が直接支払うのではなく、運転士が利用客の旅館を記録して、月末に旅館組合を通して各旅館へ請求する

## 導入の背景

バス導入前は 14 時から 18 時ごろにかけて、JR 城崎温泉駅前に各旅館が宿泊客を送迎するための車を停車していたため、利用客から苦情が相次いだ。また、駅前での旅館の客引きもあつたことから、駅前の混雑緩和を実現するため三十数年前に旅館組合が「チェックインバス」（導入当初は町内バス）を導入することに決めた。



駅前のチェックインバス案内

## 効果

駅前に必要以上に車が止まることもなく混雑は緩和された。

多数の宿泊施設がある中で、宿泊者にとって分かりやすい送迎が実現。

各宿泊施設が自前でバスを出さなければならなかった時よりもコストが軽減されている。



城崎の町並み（写真提供：豊岡市）



まんだら湯（写真提供：豊岡市）

## その他参考となる情報

大きな旅館やホテルでチェックインバスの利用者が多い際は、事前にファクスで組合まで利用者数を知らせてもらい、状況に応じて全但バスにマイクロバスから大型バスに変えてもらっている。



名物である「外湯めぐり」の様子（写真提供：豊岡市）



# 16

島根県  
大田市 大森地区  
石見銀山

## 住民生活と共存でき、悪条件な道でも安全な交通としてグリースローモビリティを実装した事例

### ■ 取り組み主体

大田市（レンタサイクル河村へ運行委託）  
株式会社バイタルリード

### ■ 交通課題

周遊交通

島根県 大田市  
大森地区

人口：402人  
面積：29.35 km<sup>2</sup>  
人口密度：13.69人 / km<sup>2</sup>



### 概要

高低差の大きい山間にあって道路が狭く、住民生活も営まれている人気観光地において、低速・排ガスを出さないというグリースローモビリティ（以下、グリスロ）のメリットに注目。観光客向けの交通手段として導入され、「ぎんざんカート」という愛称で路線バスの終点となっている集落から観光施設（龍源寺間歩）へのアクセスとして利用されている。

出発地から終点までの運賃（400円）と住民利用のある終点手前のバス停までの運賃（100円）に差をつけ、収益化と住民生活における安価な利用の両面を実現している。

### 運行方法

自家用有償旅客運送の登録を受けて定時定路線で運行。



グリスロのスタートである「大森代官所跡」



グリスロのゴールである龍源寺間歩付近

### 費用負担

#### ● 支出

- ・ 環境省の実証実験期間中（イニシャルコスト）
- ・ 車両費（ゴルフカート型2台）・ 保険費・ システム開発保守等々かかる約5300万円は環境省の補助を活用（実験後、車両は環境省から大田市へ無償貸与）

#### ● 収入

- ・ 令和4年度の運賃収入は約800万円
- ・ ※補助事業の活用および沿線の観光事業による収入増により地域全体で支える考えで運行

### 効果

住民生活への悪影響を抑えつつ、住民の足と移動制約者を含む観光客の足を確保しており、過去運行していたバスとグリスロを比較すると飛躍的にCO<sub>2</sub>削減ができています。



「ぎんざんカート」の運行ルート

### 導入の背景

2007年に石見銀山が世界遺産に登録された際、「パークアンドライド」方式の導入により、駐車場や麓からの路線バスの終点となる大森地区と龍源寺間歩とを結ぶバスが導入されるとともに、バス以外的大型車両の進入が禁止されたが、騒音や排ガスによる住民生活への悪影響を踏まえ、1年で廃止。

以降は大森地区から龍源寺間歩の間を「パークアンドウォーク」として大森地区より先の観光車両進入を禁止した。

一方、観光客向け駐車場や大森地区と龍源寺間歩までの間には相当の高低差があり、高齢者など移動制約がある人にとって観光が困難となっていたことから、2017年ごろから改めて住民自らがあべき姿について検討し、国の支援も得た複数手段の実証実験を経て、ゴルフカート型のグリスロの導入に至った。

### その他参考となる情報

2017年以降の再検討の段階においてグリスロの運行に対する否定的な住民意見もあったが、地域のレンタサイクル事業者が幾つもの自治体を説得し、導入が実現した。



パークアンドライド実証実験の様子



運営しているレンタサイクル河村の場所はもともとはガソリンスタンドだった



ルートで料金に差を設けている

# 地域課題から発生した AI オンデマンド 交通を観光需要にも対応させた事例

## ■ 取り組み主体

三豊市  
暮らしの交通株式会社

## ■ 交通課題

周遊交通

香川県 三豊市

人口：61,518人

面積：222.7 km<sup>2</sup>

人口密度：276.24人 / km<sup>2</sup>



提供：暮らしの交通株式会社

## 概要

若者の声を発端にして地域内外のさまざまな企業が参画し、AIオンデマンド交通「瀬戸内mobi（モビ）」を提供している。住民の利用に加えて、観光客の周遊交通手段としても利用されている。



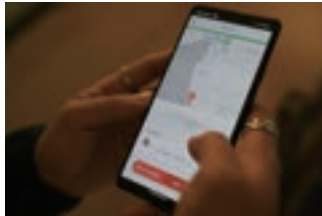
夕日が反射する様子が美しいと観光客に人気のスポットである父母ヶ浜

## 運行方法

実証実験として運行（道路運送法第21条許可）。



「mobi」の車内  
(写真提供：暮らしの交通株式会社)



スマートフォンで簡単に呼び出せる  
(写真提供：暮らしの交通株式会社)

## 費用負担

2022年度に国土交通省の「共創モデル実証プロジェクト（共創による地域交通形成支援事業）」採択を受けた。実証終了後の支出は月額約160万〜200万円、収入は月100万円未満。資金面で行政からの補助はない。運賃は定額制で一般は月額6000円、学生は月額3000円に設定。観光客向けのワンタイム利用（1回乗車で500円）もできる。

## 導入の背景

公共交通機関の不便について、「地方での移動の格差が学習機会の格差につながっている」という課題感を持っていた慶應義塾大学の現役学生であった田島颯氏の呼び掛けで、2022年9月に地域タクシー事業者、地元企業、地域関連企業、計12社が発起人となり「暮らしの交通株式会社」を設立。香川高等専門学校（詫間キャンパス 三豊市詫間町）への交通手段をデマンド交通によって確保するとともに、近年SNSなどで話題となつて多くの観光客が訪れるようになった父母ヶ浜への送迎でも活躍している。



暮らしの交通株式会社のウェブサイトでは mobi を使った観光モデルコースを紹介している

## 効果

利用者の構成は、学生が6割、観光客が3割となっている。特に学生の保護者から好評で「送迎の必要がなくなった上に、プールのドライバーが家の近くまで送り届けてくれて安心」といった声や「毎日利用することを考えれば、学生料金設定は安価に感じる」との声がある。サービスの自走化に向けて観光客や高齢者の利用を促進していく。

## その他参考となる情報

移住者の視点から教育における課題を見つけ、解決のために尽力している田島氏の存在は地域にとつて大きい。

WILLER 株式会社とKDDI 株式会社による合弁会社 Community Mobility 株式会社 が提供するデマンド交通システムブランド「mobi」では、デマンド交通では珍しい原則月額定額料金を設定している。実現に向けては瀬戸内地域のタクシー事業者への説明や調整が最大の困難で「瀬戸内mobi」に参画しないというタクシー事業者もあった。しかし、運行を開始してみると「mobi」は学生の利用が大半で、市内運行エリアのタクシー利用者は高齢者が中心だったためパリの奪い合いにはならなかった。



暮らしの交通株式会社 田島颯代表取締役社長  
(提供：暮らしの交通株式会社)

# 地域組織がエネルギーの地産地消を実現し、 離島での観光周遊交通を実現させた事例

## ■ 取り組み主体

一般社団法人姫島エコツーリズム  
T-PLAN 株式会社

## ■ 交通課題

周遊交通

大分県 姫島村

人口：1,549人

面積：6.99㎢

人口密度：221.60人/㎢



## 概要

一般社団法人姫島エコツーリズムが、超小型電動モビリティなど29台を導入して離島でのレンタカー事業を行っている。観光客が減少する時期には他地域への貸し出しも行ったり、稼働率向上にも積極的である。電動モビリティと事務所を使う電気についてはすべて事務所横のソーラーカーポートで発電した再生可能エネルギーで充当。エコカーを基軸にした事業で島に新たな雇用も創出している。グリスノックを活用して自家用有償旅客運送による高齢者の通院やガイドが運転手となった観光客輸送も行っている。



レクチャーを受ける観光客

## 運行方法

一般社団法人姫島エコツーリズムが自家用自動車有償貸渡業（レンタカー事業）の許可を得るとともに、自家用有償旅客運送の登録を受けて運行。

## 費用負担

- エコカー導入  
国土交通省の補助金：超小型モビリティ導入促進事業  
環境省の補助金：二酸化炭素排出抑制対策事業費  
等補助金（公共交通機関の低炭素化と利用促進に向けた設備整備事業）
- 充電機を設置  
大分県が半分を補助
- その他、クラウドファンディングも活用し、寄付者には特産品やレンタカー利用をサービスしている。運営費については当初は年間500万円ほどだったが、規模拡大に伴い年間1000万円程度となっているが、経営は安定

## 導入の背景

観光客が周遊に利用できる交通手段がレンタサイクル以外になく、徒歩ではフェリーの時間までに島内観光し切れないという課題があった。また、島の自然と環境を守ることや船でのガソリン輸送コストが高いことなどを考慮し、太陽光発電を活用したEV車を導入することとなった。



フェリーは行きと帰りで各12便ずつ



太陽光発電ですべて充電



電動モビリティレンタカーなど29台の一例（2023年8月時点）

## 効果

来島者が滞在時間を有効活用できるため島内での消費機会が拡大された。  
島で電動モビリティに乗ること自体が旅の楽しみになり、事業開始後は来島客数が10%増加している。

## その他参考となる情報

一般社団法人姫島エコツーリズムは中核法人のT-PLAN株式会社の他、観光関係者やコンサルタント、金融機関等から構成される観光・地域振興と低炭素社会づくりを目的とした地域組織で、農泊の地域協議会（またはその中核法人）と近い立場で取り組みを実施している点が参考となる事例である。  
取り組みの宣伝には姫島村役場や地元メディアの協力もあった。事業実施に必要なノウハウについては島外のレンタカー会社で従業員が研修した。



観光客も多く訪れる「姫島の盆踊」



レンタルを行う姫島エコツーリズムの2階はカフェも併設